

講演.6

漢方治療が奏功した幻聴の1例



峯 尚志 先生

峯クリニック

はじめに

東洋医学は東洋哲学思想を背景に持ち、治療に応用できる多くの考え方や、具体的な治療の指示としての薬方を持つ宝の海である。今回、幻聴を主訴として来院した高齢女性の病態を天王補心丹証と判断し、エキス剤による類似処方を用い、「移精変気の法」と呼ばれる一種の心理療法を「上方の笑い」と共に会話に取り入れることによって、改善を得た症例を経験したので報告する。

移精変気の法

移精変気の法とは、東洋医学の心理療法ともいえるもので、患者さんの注意の視点を変えてゆくことで気の流れを整え、治癒へのステップアップを図ろうとする技法である。黄帝内經素問『移精変氣論篇』

生地黃、人参、丹參、玄參、茯苓、五味子、遠志、桔梗、當歸、天門冬、麥門冬、柏子仁、酸棗仁、朱砂

効能：滋陰養血、補心安神

主治：心腎陰虛

病機：内傷七情、慢性病により陰血を消耗し、心腎陰虛で内熱を生じる。

症状：不眠、多夢、驚きやすい、焦燥感、動悸、健忘、便秘、口内炎

図1 天王補心丹『摂生秘剖』

に「古の病を治するは、惟だ其の精を移し気を変じ、祝由して已るべし」との記載があり、今泉玄祐や和田東郭も、簡単な心理療法として実践している。

今回、この移精変気に天王補心丹の使用を考えた。本処方は、基本的な病態として心腎陰虛で内熱を生じ、症候としては不眠や驚きやすい、焦燥感、あるいは健忘などに用いるものである(図1)。中国では頻用処方であるが、わが国では残念ながらエキス剤がないため¹⁾、六味丸・黃連解毒湯・酸棗仁湯エキス剤の合方による代用処方を用いた。

症例

症例 幻聴を主訴とした76歳、女性

主訴は階下の住人の声が聞こえる(幻聴)という。3年程前から階下の住人の「殺すぞ！」といった声が始終聞こえ、特に夜間や明け方に強く聞こえる。近医で抗精神病薬の処方を受けるも効果が得られない。声が聞こえると昼夜に関係なく、みえない相手と大声で口論する。また時には、階下の住人宅を訪れ文句を言うこともあります、家族の精神的疲労が重なり、家族とともに当院を受診した。

初診時所見は、身長152cm、体重60kgと肥満傾向、血圧は160～170／80～100mmHg、脈拍65～70／分、心室性期外収縮を認める。血液生化学検査に特記する異常は認めない。東洋医学的所見として、脈は沈

患者：そりゃあね。私も大人ですからちょっとのことは辛抱しますよ。

そやけどね、いきなり「殺すぞ」と言うのは、あまりにも失礼でしょう。それならこっちも黙っちゃいいないんですよ。

(ごもっとも、筋が通っている。)

医師：そうやな、あんたの言い分もわかるわ。そやけど大阪人なんやからつっこまれたらボケで返したらどうやろ。

患者：私だって大人げないとは思いますよ。でもあまりに失礼やから怒ってしまいます。

医師：そんなら、「殺すぞ」と言われたら「私の脂肪を殺してください」って言うてみたら。それで痩せたら一石二鳥やんか。

患者：そんなあほなこと言う先生知らんわ。まあいっぺんは言うてみますけど。

図2 会話1：深刻になったらあきまへん！

1985年 熊本大学医学部卒業
 1986年 医療法人木津川厚生会加賀屋病院にて三谷和合先生に師事
 1999年 上海中医薬大学に短期留学
 2004年 峯クリニック開設

弦、舌はやや紅色で薄白苔を認める。腹診は膨満して腹力あり。肥満でやや赤ら顔、頬部赤、眼光鋭く声は力強く大きく、ときに怒気を含むこともある。一方、性格は朗らか、世話好きで曲がったことが大嫌いのこと。娘や孫と同居するようになってから家族から迷惑がられるようになった

初診後の経過：階下の住人はボケているからしようと理解してくれるが、ほうっておくと階下の住人にまで文句を言いにいく。家族にとっては何を言い出すか気が気がしない。階下に行かない時でもひとりで大きな声で言い争っている。

肝胆経の湿熱証として竜胆瀉肝湯(一貫堂：煎じ)を処方したところ、服薬4週間で体重が2kg減少し、体調がよくなり動きが軽くなった。また、興奮の程度も軽快したが、幻聴に変化はみられない。幻聴に伴った認知症の症状はない(図2)。

6週～7週の経過：再度、証を検討したところ、肥満気味ではあるが、陰血不足の虚陽偏亢で、天王補心丹証と考えた。そこで天王補心丹をエキス剤で代用するため、六味丸・黄連解毒湯・酸棗仁湯エキス剤の合方を用いたところ、言動に落ち着きが出て幻聴がなくなり、階下の住人とのトラブルも収まった。本処方は、天王補心丹に比べ、陽亢の強いもの、イライラや怒りなどの興奮症状が強い症例に有効と思われる(図3)。

7週目以降の経過：六味丸に黄連解毒湯を合包することで、知柏地黄丸のように、陰虚陽亢証にも応用可能である。さらに酸棗仁湯を加えると、興奮が

抑えられるばかりではなく、張り詰めた糸が緩み、“まつたり”とした精神状態になる。酸棗仁湯により、抑制されたというよりは心肝の血が補われたという感じであった。なにはともあれ、幻聴はなくなり、階下の住人とのトラブルもなくなった

まとめ

黄連解毒湯は西洋医学的に脳循環改善作用や鎮静作用が報告されている。本症例は赤ら顔で怒りっぽく興奮しやすい状態と黄連解毒湯の証がみられ、加齢に伴う陰分の不足から、精神的な抑制が効きにくい傾向がある。そこで六味丸で腎陰を補い、さらに酸棗仁湯で心肝の血を補うことで確かな効果を発揮したと考えられる。黄連解毒湯は西洋医学的に脳循環改善作用が報告されているが、単剤では陰分を損なうため、六味丸と酸棗仁湯で陰血を補うことでバランスのよい組み合わせとなる。高齢者の場合、肥満で実証にみえても陰虚が潜んでいることがあるので注意を要することを本症例は示唆している。

なお、治療に当たって、医師も患者さんをとりまくシステムの一員として関与し、深刻な病状を「笑い」を用いることによって軽く取り扱うことができた。日常診療では、身近な材料の利用を心がけており、今回は、「大阪弁」をふんだんに利用した。なお、大阪弁の「ボケ」や「アホ」という言葉は必ずしも差別用語ではないことを付け加えておく。現在は、六味丸3包、酸棗仁湯3包、黄連解毒湯2包で経過良好である。

1) 向井 誠：phil漢方、8：77, 2004.

Comments

後山 峯先生の診察室は、まるで漫才の世界のような感じがします。“峯風”味付け漢方治療とでも呼べるのではないでしょうか。しかし、これは漢方医療というものがまさに全人的医療であるということを上手に紹介していただいたものだと思います。峯先生、どうもありがとうございました

医師： この頃、調子はどうですか？
 患者： あまりガーガー言わなくなりましたねえ。
 医師： 聞こえないときもあるんですか？
 患者： 聞こえないときもあります。
 先生、下の人、きっとボケてはるんですね。
 (……………しめた！)
 医師： そうや、きっとボケてはるんや。
 気の毒やから、あんまり責めんとそっとしといたら
 工工ねん。
 患者： そうです。
 医師： ディケアでもよく人の面倒をみてるそうやないの。
 ここは広い心で接してあげたらいいんと違う？
 患者： わかりました。

図3 会話2：ボケ返しの術